「私のの子どもの頃の夏休み」（抜粋）　　松田　寿夫

昭和20年代、常呂川での川遊び

『日吉小学校ＰＴＡ文集「くまがわ」第１号』掲載

（略）私は常呂川の河口に近い富田牧場の向こう岸の高台に、小学時代も中学時代も、つい最近日吉に来るまで過ごしてきました。

この高台から常呂平野と曲がりくねって流れる常呂川とその向こうに横たわるイワケシュ山を四季を通じて眺めてきました。その風景は一生私の網膜に焼き付けられた画像だと思います。

その小学時代（注：昭和22年から昭和27年）を過ごした中で、この常呂川で遊んだことがかなり多くの事象と相まって、今だんだんと鮮明に蘇ってきます。

夏休みの暑い終日を父母に叱られるのを承知で、暗くなるまで川で遊んでおりました。その当時はサケマスふ化場が今より少し川下に施設されており、そこが我々子どもたちの恰好の遊び場だったのです。

私は同級生の一人と手をつないで川の中に半島のように出た場所からこちらの岸に向かって歩いてきました。するといきなり２人ともスーッと深みに沈んでしまいました。半島とこちらの岸との間には、やはり小学２年生の子どもの背では立てないところがあるのです。そして、川下に行くに従って深くなっておりました。しかし、私と彼は沈みながらも手をしっかりつないで無我夢中で足を動かしていました。そして、ゴツンと頭が泥にぶつかったところで２人は同時に立ちました。

背の立たない深みは、おそらく10メートルくらいの間だったと思います。私と彼はこのときから初めて泳ぎというものができるようになった訳です。（略）

川の水も当初の頃は背くらいのところでも自分の足が見えましたところ、年代が下がるごとに水は汚れてきました。中学になった頃からは体にベトベトしたものが付くようになり、とうとう川で泳げなくなりました。

当時、さかんに泳いだ頃はカニ、エビ、カラス貝、シジミ、ドジョウ、ヤツメウナギなどがたくさんおり、これらを捕ることも遊びの一つでした。

そして泥遊び。川に向かって坂になっているところに水をかけ、滑り台のように作り、そこを腹ばいになったり、尻滑りしながら水に飛び込んだりして遊んだものです。

また、川を泳いで渡れるようになってからは、富田牧場のおとなしそうな馬をつかまえて乗り回したものです。

休みが終わる頃、このふ化場にヤン衆が入ってきて網引きが始まります。８月はまだマスで、９月に入るといよいよ秋アジ漁になります。この網引きがおもしろく、子どもたちは終日飽きずに見物していたものです。ヤン衆の網引きのかけ声に子どもたちも一緒になって声を出しておりました。そうして夕闇が迫る頃、ヤン衆の誰かが〈ほうれ、おまえらも飽きずに見てたからやるべ〉と秋アジ１本ずつをくれることがありました。この時の子どもたちの喜びようは大変なものです。体に似合わず大きな魚を引きずるようにして、勝ちどきをあげ、意気揚々として家に帰ってきました。いうまでもなく、いつもの母の小言もその日ばかりは聞かれませんでした。魚の焼ける香ばしい臭いと〈夕焼けこやけで日が暮れて〉の歌ぴったしの情景と相まって彷彿と今でも蘇ってくるのが、私の子どもの頃の

夏休みの思い出です。